
Abstract**Improvement of English Four Skills through Oral Presentation****Tomoko Sato**

A study investigated improvement of English four skills through oral presentation. A survey conducted at the very beginning of the academic year shows that almost all students were eager to improve their skills of speaking and listening after learning English for six years and after cramming English grammar and vocabulary for a year simply for an entrance examination. As college students they were anxious for practical and active English.

To realize their desire, students were afforded an opportunity to make presentations in class for the first semester. It was a challenge to the students whose high school teachers focused on a reading skill at the expense of speech. Each group of four students presented, for ten minutes, what they were interested in most or what they were concerned about most. One class selected sports for their subject, and one group, whose topic was wheelchair basketball, discussed how the sport played an important role to enhance the quality of life of disabled persons. Another group dealing with Judo maintained that Judo, a national sport of Japan and an international sport as well, might enable us to establish world peace by means of its mind of deference toward an opponent and observance of the proprieties.

For the presentations, students read books pertaining to their topic to collect information; they wrote papers with critical thinking and original views; they practiced reading the papers a great deal; they concentrated on listening to their friends' presentations so that they could answer quizzes afterward. They answered questions from the floor, and some students expressed their ideas and opinions about the topic.

A questionnaire was conducted immediately after the presentations. Results indicate that every single student thoroughly enjoyed giving a presentation, because it was a creative work attended with intellectual gratification. Their presentations were a group work, but an individual person had to perform his/her own part. Each student was never lost in a group. They reviewed grammar and made frequent use of an English-English dictionary for sophisticated sentences; they practiced reading, paying minute attention to pace of delivery and tone, and also accuracy and articulation of languages so that their presentations would be much easier to follow; they were able to listen to the presentations more intensely. In the presentations their language skills were never used in isolation, but rather the four skills were integrated. Students averred that they gained confidence in writing, speaking and listening, and that the confidence would enable them to achieve more persuasive performances for the second semester. It is concluded that oral presentation may have some significant effect on improvement of English four skills.

オーラル・プレゼンテーションを通した英語4技能向上の試み*

佐藤 智子

1. はじめに

2003年経済協力開発機構の41カ国・地域における276,000名（15歳の生徒）を対象にして実施された「生徒の学習到達度調査」（PISA: Program for International Student Assessment）の結果が、2004年12月に発表された。日本の生徒の読解力が、前回2000年の8位から24点下がり14位に転落したことにともない、中山成彬文部科学大臣が全国学力テストの実施、競い合う教育、総合学習の廃止を打ち出し¹⁾、教育関係者に衝撃を与えたことは記憶に新しい。もっとも、数字だけが一人歩きし、読解力リテラシーの意味する内容が、「自分の目標を達成し、知識や潜在能力を発達させ、社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、活用し、反省する力²⁾」であることは等閑視されてしまった³⁾。日本で行う知的学力をはかる調査とは異なる土俵でPISAが行われたことは確かであるが、「社会に参加するため」の教育としては、特に、自分の意見を述べる記述問題に白紙が多かったことに象徴されるように、日本語教育は問題を内包していることを露呈した。

一方、外国語教育、特に英語教育に関しては、中央教育審議会が公立小学校における英語教育が議論されており、様々な分野で盛んに話題にされている⁴⁾。それでは、大学における英語教育の現状はどうなっているであろうか。大学・短大への進学率が過半数を上回り（2005年春の進学率は51.5%）、入学試験の方法も多様化し、英語力の差が大きい大学生を抱えながら、500以上ある大学が独自の目標を掲げ⁵⁾、多様な実践を続けているというのが現状を的確に表現していると言える⁶⁾。その証拠に『英語青年』が2004年12月号で「大学の英語教育」という特集を組み⁷⁾、また、2005年9月号では「詩を忘れるな」という特集を組み、英詩を一般教育科目の中で取り上げた実践例を紹介している⁸⁾。模索を象徴するように、大学の英語教育を扱った論文には、CALL、習熟度別クラス、少人数クラス、ネイティブスピーカーによる日本語を介在させない講義、検定試験（TOEIC、TOEFL、英検など）や海外研修の単位化などの言葉が躍っている。ひとつひとつの方法は正当な目的を持ち、十分な効果があがっていると理解している。しかし、最も重要なのは、教師の自立性である。アンケートなどを通して教育を享受する側、すなわち学生の要望や意見を把握し、また、データをもとにして学生の英語力を客観的に認識したところから、望ましい教育方法や内容が自ずと生まれてくると思う。

本稿では、前述を踏まえ、教師の英文解釈や英文法の解説を聞き、板書を書き写すという受動的な英語学習とは少し違ったアプローチの仕方で英語に接する機会を学生に与え、英語を学ぶ喜びを実感させるためにどのような工夫をしているか、その一端を紹介する。学生が英語学習の達成感を味わうことができるように、講義にオーラル・プレゼンテーションを取り入れているが、英語で主体的に自己表現できたという喜びは予想以上に大きい。オーラル・プレゼンテーションは英語の4技能を有機的に統合させ、そして向上させるうえで、効果的な一方法であると思う。論の展開としては、最初に、学生の英語力も含めて本学（岩手県立大学）の英語教育の現状を説明する。それを踏まえて、次に、オーラル・プレゼンテーション導入の経緯と指導方法を詳述し、そして成果を考察する。最後に、一般教育の英語と専門教育との関連性にも触れながら、英語教育の課題と展望を示す。

2. 岩手県立大学の英語教育の現状と学生の英語力

(1) 岩手県立大学の英語教育の現状

岩手県立大学は看護学部（定員90名）、社会福祉学部（同90名）、ソフトウェア情報学部（同160名）、そして総合政策学部（同100名）の4学部から構成されている。入学試験の方法としてセンター

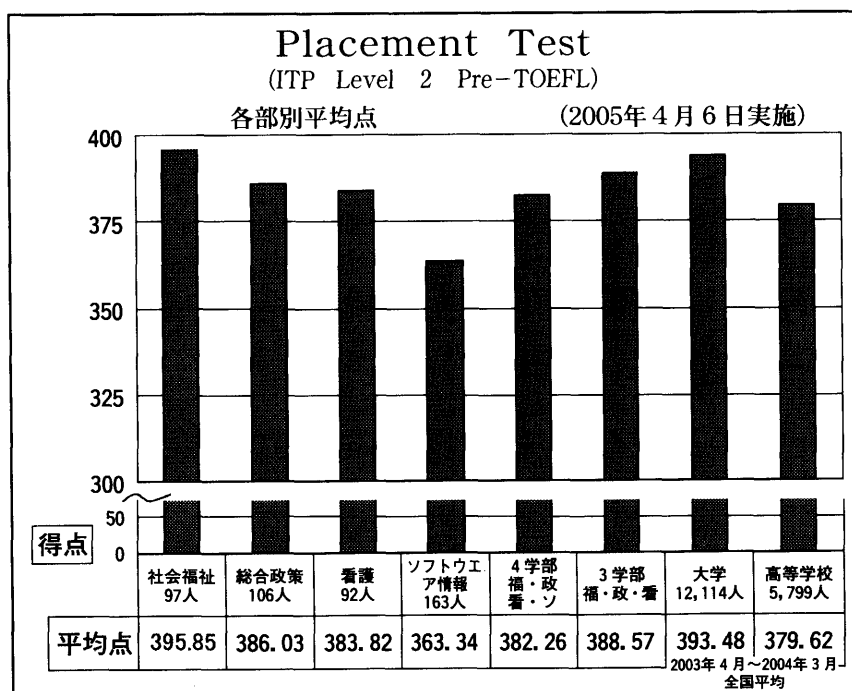
試験を課さない学部もあるので、入学時点での学生の英語力の幅は大変大きい。1998年4月の開学から4年間は、4学部混成の1クラス50名強、週2回で英語の講義を行ったが、単位未修得者（学期末試験などを受けたが単位を修得できなかった学生）や放棄者の数が多くなり、改革を迫られた。その結果、スタッフの増員など物理的な改善が望めない状況で採用することができた方法は、プレースメント・テストを用いたクラス分け、25名程度の少人数クラス、そして週1回の講義である。

この制度になってから3年が経過したが、昨年度（2004年度）の実績を見てみると、各学年450名前後の学生が英語を受講しているが、単位未修得者は1年次生前期12名・後期10名、2年次生前期4名・後期7名と、大変少ない数が並んでいる。放棄者の数も激減している。学年全体の1割を超えることはほとんどなく、1年次生前期23名・後期36名、2年次生前期37名・後期38名である。これには英検、TOEFL、TOEICの試験で単位を認定してもらう方法を取った学生や、休学の学生の数も含まれているので、少人数クラスの効果がはっきりと数字に表れている。

(2) 学生の英語力

ITPのPre-TOEFL level 2を用いて、2005年4月6日に新入生を対象に実施したプレースメント・テストの結果から、学生の英語力を見てみる（図1）。

図1 プレースメント・テストの結果



このテストの満点は500点であるが、学生の成績は最高点が500点、最低点が303点であった。各学部の平均点は、高いところから並べると下記ようになる。

社会福祉学部・・・395.85点

総合政策学部・・・386.03点

看護学部・・・383.82点

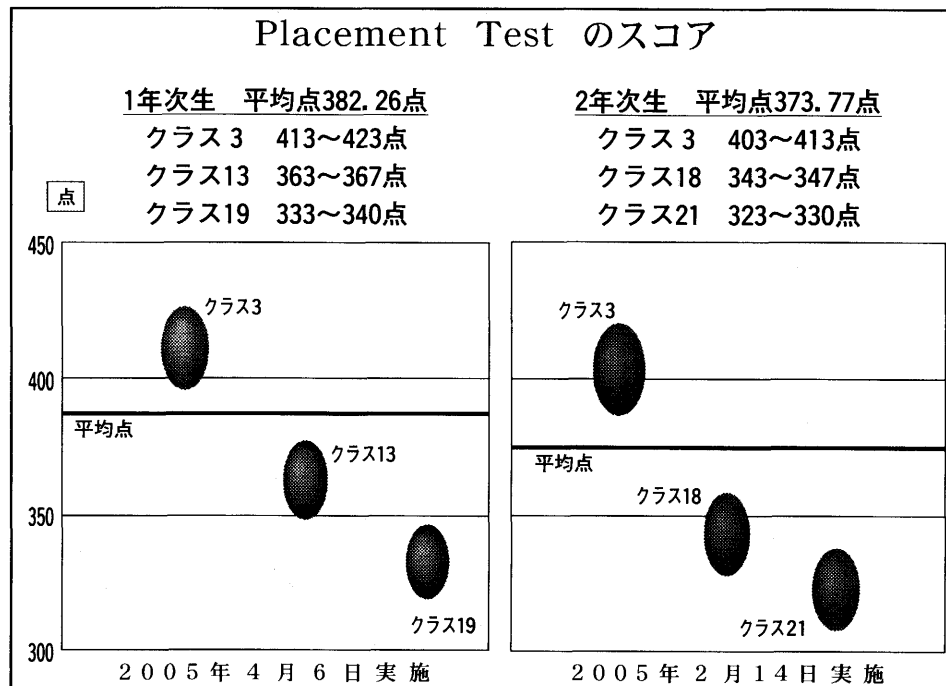
ソフトウェア情報学部・・・363.34点

4学部の平均点は382.26点であるが、ソフトウェア情報学部が他の学部と比較すると大変低い。この学部を除いた3学部の平均点は388.57点で、日本の4年生大学の平均点393.48点と比較すると4.9点低いだけである。あるいは、高校を卒業したばかりなので、高校の平均点と比較するのが妥当か

もしれない。高等学校の平均点は379.62点なので、それよりは上回っている。総合的に見て、基礎力は身につけている学生が多いと言える。なお、ソフトウェア情報学部の平均点が低いのは、大学入試センター試験を課さないで、学部独自の入学試験方法を取っているからであり、その試験において英語の占める割合は、大きいとは言えないようである。

このプレースメント・テストのスコアに応じて、1年次生を1から20のクラスに分ける。2年次生は前年度の2月に実施したプレースメント・テストのスコアによって、23のクラスに分ける。筆者は、2005年度前期において1年次生3クラス、2年次生3クラスを担当している（図2）。

図2 担当クラスのプレースメント・テストのスコア



1年次生のスコアは次のようになっている。

クラス3 413点～423点

クラス13 363点～367点

クラス19 333点～340点

4学部の平均点382.26点以上のスコアを取っている学生のクラスが1クラス、それ以下が2クラスである。2年次生のスコアは下記である。

クラス3 403点～413点

クラス18 343点～347点

クラス21 323点～330点

2005年2月に実施したプレースメント・テストの平均点が373.77点であるので、2年次生も1年次生同様、平均点以上が1クラス、それ以下が2クラスである。

3. オーラル・プレゼンテーションの取り組み

(1) 目的

2005年4月に、学生に英語の4技能の中でどれを向上させたいかというアンケートをとった結果判明したことは、多くの学生が **speaking** (90%) と **listening** (86%) の力を付けたいと望んでい

ることである。高校の英語の科目に「オーラル・イングリッシュ」があるが、学生からの聞き取り調査によると、多くの高校で受験のための英語にあてている。また、より実用的な英語能力の向上を目指して、言語指導助手（ALT: Assistant Language Teacher）が配置されているが⁹⁾、高校3年生のクラスは担当していない場合が多い。受験英語漬けの1年間を送ってきた学生にとって、話したいという欲求は相当に強いと思われる。この欲求を満たすために、小さなクラスの特徴を最大限に生かして、講義にオーラル・プレゼンテーションを導入している。これまで担当したクラスでは、高校の英語科コースを卒業した学生が1名オーラル・プレゼンテーションの経験を持っていたが、残りの学生にとってプレゼンテーションは初めての挑戦である。オーラル・プレゼンテーション導入の目的は、これまで受験のために英語を勉強してきた学生に、コミュニケーションのために英語を学習する機会を与えることである。また、もうひとつの目的は、主体的に文を作り、能動的に発表する学習方法を確立し、さらに実際に英語を使ってみる喜びを実感させることである。一人一人の学生がクラスの中で個人として埋没することなく、自分の努力を表現する場を確保することは、英語学習においてつとに重要である。

このオーラル・プレゼンテーションの一貫したモチーフは、理解の結果を作品として結実させること、そのために英語の4技能を有機的に統合させることである。学生たちは自ら設定したトピックを完成させるために、文献を読み、自分の意見を織り込みながら論を展開させていく。そして、それを英語に直し、発表のために読む練習を重ねる。ここまでが「読む」、「書く」、「話す」という3つの技能を向上させることを目指した部分である。オーラル・プレゼンテーション当日は、他のグループの発表をメモを取りながら集中して聞く。これがもう1つの技能である「聞く」力の向上である。これまでの伝統的な受信型の英語教育を離れ、「参加」をキーワードに授業を創り出すことは、学生に常に能動的、そして、創造的な行為を求めるということであり、それは大学教育の大きな目標である自立した学習者の養成と密接に連動する。

(2) プロセス

講義の第2週目にオーラル・プレゼンテーションの説明をする（表1）。

表1 オーラル・プレゼンテーションの日程（2005年度前期の事例）

週	月 日	項 目
1	4 / 11 ~ 4 / 15	
2	4 / 18 ~ 4 / 22	オーラル・プレゼンテーションの説明 テーマ決定 グループ編成(リーダーとモデレーター選出) トピック決定
3 ~ 5	4 / 25 ~ 5 / 13	
6	5 / 16 ~ 5 / 20	5 / 16 : 日本語原稿提出期限
7 ~ 9	5 / 23 ~ 6 / 10	
10	6 / 13 ~ 6 / 17	6 / 13 ~ 6 / 24 : リハーサルの申し込み 6 / 16 : 英語原稿提出期限
11	6 / 20 ~ 6 / 24	
12	6 / 27 ~ 7 / 1	6 / 27 ~ 7 / 8 : リハーサル
13	7 / 4 ~ 7 / 8	オーラル・プレゼンテーション (3グループ)
14	7 / 11 ~ 7 / 15	オーラル・プレゼンテーション (3グループ)

内容は、3名から4名のグループで、10分以内で、あるトピックについて英語で発表するというものである。その時にフィードバック・フォーム（feedback form）を用いて説明を施す（表2）。

表2 オーラル・プレゼンテーションのフィードバック・フォーム

Oral Presentation Feedback Form

Group: _____		TOTAL POINTS				
		× 5 points	× 4 points	× 3 points	× 2 points	× 1 point
		=	=	=	=	=
		Excellent	Very Good	Good	Fair	Poor
A. Subject Matter Handling						
<i>Introduction:</i> Was opening appropriate, welcoming? Did presenter give a clear idea of what was to follow?						
<i>Content:</i> Was presentation clear and concise? Were there enough details/examples/illustrations?						
<i>Organization:</i> Were transitions clearly signalled? Was presentation easy to follow?						
<i>Conclusion:</i> Was there a clear summary to help audience focus again on issues presented? Was ending appropriate?						
B. Delivery						
<i>Poise & Confidence</i>						
<i>Voice:</i> Was it well projected? Were there effective variations in pace of delivery and tone?						
<i>Eye Contact</i>						
C. Audience Orientation						
Was the language appropriate for the audience? Diplomatic? Persuasive/convincing?						
D. Audio-Visual Aids						
Were they effectively organized and efficiently managed?						
E. Language						
<i>Accuracy, Fluency & Articulation</i>						

(出所: The National University of SingaporeのThe Centre for English Language Communicationを訪問した際に提供された資料をもとに作成)

さらに、重要事項として下記の3点を加える。

- ① 論の流れに一貫性 (coherence) を持たせること。

グループ活動ではあるが、往々にして個々の学生の学習成果を寄せ集めて事たれりという状態になりがちなので、冗漫を避けるために絶えず中心線を確認すること。

- ② 最後に、必ず自分たちの意見を織り込むこと。

収集した情報を正確に解釈し、客観的、批判的に分析することによって、認知力や思考力を涵養し、説得力のある文章を作成すること。

- ③ 単語は難しいものを使わないこと。

和英辞典から取ってきた単語をそのまま使わないで、英英辞典でその単語の説明を読んで、そこから使える部分を取り入れること。難しい単語は聴衆の速やかな理解を阻害するということを、常に念頭に置くこと。

次に、テーマの決定に移っていく。オーラル・プレゼンテーションの主体はあくまで学生であるので、学生の意見を尊重する。「最も興味のあること ("What we are interested in most")」、あるいは「最も関心のあること ("What we are concerned about most")」、すなわち、何でも良いとするか、あるいは何か大きなテーマを1つ取り上げるか、多数決で決める。本学もセメスター制度を採用しているが、幸いに英語の科目名は変わっても (1年次生は「英語表現Ⅰ」と「英語表現Ⅱ」、2年次生は「英語表現Ⅲ」と「英語表現Ⅳ¹⁰⁾」、通年で同じ学生の教育にあたることのできる。このため、前期は予行演習、後期が本番という理解をすることができる。前期は入口を広くして、と

にかく学生にオーラル・プレゼンテーションの中に入れてもらう。そこで、入りやすいようにテーマは学生の興味のあることを選ぶ。知的な楽しみがともなえば、初めての試みでも最後まで遂行することができる。後期は“Something Japanese”という大きなテーマを与える。足元を見つめ、何か日本のことを英語で説明できるようになってほしいという願いからである。

テーマが決まった後はグループ編成であるが、これも学生の意向に沿って、自分たちで自主的に編成するか、あるいはこちらが4学部のバランスを考えながら事前に作ってきたものを探るか学生が決める。グループ編成が終わったら、グループ毎にリーダー（プレゼンテーションの準備を進めるにあたってのまとめ役）とモデレーター（発表の時の進行役）を選び、最後にトピックを何にし、これからの作業をどのように進めていくかを学生たちは話し合う。2005年度前期に学生たちが決めたテーマはスポーツ、音楽、岩手県などである。スポーツのトピックとしては、車椅子バスケット、柔道、相撲、ゴルフ、水泳などが並んだ。自分たちが設定したトピックに沿ってそれから約1カ月間、学生たちは私のアドバイスを受けながら、日本語の原稿作りに励む。その後さらに1カ月を費やして、英語の原稿を作る。その間私は全ての原稿に目を通し、添削を施したり、質問をしたりして、学生たちと一体になりながら原稿の完成を目指す。

一方、語学補助員の人たちは第10週になると、リハーサル申し込みの案内と AV Hall の説明をする（表3）。

表3 オーラル・プレゼンテーションのリハーサルの案内（平成2005年度前期の事例）

ORAL PRESENTATION

リハーサルのご案内

英語表現Ⅰ火曜日2時限クラス19の皆さん、7月5日・12日のプレゼンテーションまで、あと約1ヶ月となりました。グループごとの準備、打ち合わせは進んでいるでしょうか。
さて、下記のとおり、本番に向けて AV ホールでのリハーサルの機会を設けたいと思います。
ぜひこの機会をご利用下さい。

記

1.日 時 6月27日(月)～7月8日(金)の昼休み(12時～13時)
※6月30日・7月7日(木)は12時30分までとさせていただきます。
1グループにつき15分間の利用となります。

2.場 所 AVホール

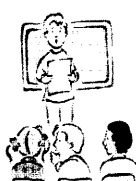
3.注意事項

- ① リハーサルの申し込み
 - ・ リハーサルを希望するグループは、語学自習室(メディアセンターA棟図書館内4F)で申し込みをして下さい。
 - ・ メールでの申し込みは受け付けません。
 - ・ 申し込み期間は、6月13日(月)～6月24日(金)の午前9時～午後5時です。
但し、下記の時間帯はスタッフ不在の為、受付できませんのでご注意ください。
月14:30～16:20 火9:00～9:30 水9:00～10:30 木9:00～10:30と12:50～14:30
 - ・ 希望日時は先着順に決定します。
- ② デジタルビデオカメラの貸し出しについて
デジタルビデオカメラを利用したいグループは、語学自習室のスタッフまで申し出てください。
- ③ AVホールで利用できるもの

パソコン	S-VHS	書画カメラ	カセットテープ
DVD	Mini DV	CD	MD

※ 持込パソコンの音は出せません。
※ Wドライブは使用可能です。
- ④ その他
プレゼンテーションのリハーサルについて、ホームページでも情報を確認できます。
<http://p-www.iwate-pu.ac.jp/~tsato/HP/index.htm>
岩手県立大学学内ホームページ → 学部ホームページ → 総合政策部
→ スタッフ → 異文化交流論講座・佐藤智子[個人ホームページ]

問い合わせ先 英語表現Ⅲ 小野寺 onodera@ipu-office.iwate-pu.ac.jp
英語表現Ⅰ 西野 n-izumi@ipu-office.iwate-pu.ac.jp



第12週と第13週のお昼休みの時間を利用して、学生たちはリハーサルを行う。リハーサルの主な目的は、機器の操作に慣れることと、臨場感を体験することである。

そして、いよいよ本番を迎える。発表の後当然質疑応答ということになるが、なかなか手を挙げて質問する学生がいない。これを打開する方策として小テスト (quiz) を設けた。発表者は自分たちの内容に関して少なくとも3つ質問を作ってくる。しかもその質問は Yes か No で答えられるものではなく、5つの W (when, where, who, what, why) と1つの H (how) で始まるものでなければならない。そうすると、メモを取りながら聞いていてもどうしても聞き逃した箇所が出てくるので、当然質問が生まれるというわけである。発表者の質問に答えるためには、内容の8割くらいは理解しておかなければならない。

後期はさらにフィードバック・フォームを用いて、クラス内で各々のグループが発表を競っていく。得点を集計し、寄せられたコメントも付して、その結果を学生全員に配布する。1位に輝いたグループには賞状 (certificate) を与えるが、成果を確認し、喜びを倍加させるためである。

発表の際には、可能な限り英語を母語とする人 (native speaker of English) をクラスに招くように努めている。会場に少しの緊張感を持たせ、さらに学生には自分の英語がネイティブスピーカーに通じた喜びを実感させるうえで、大変効果的であると思われるからである。2004年度前期に、アメリカのワシントン州にある協定校のイースタン・ワシントン大学 (Eastern Washington University) 附属英語センター長のメアリー・ブルックス (Mary Brooks) 先生を2週間にわたりクラスに招いたが、予想以上の成果が上がった。発表後ブルックス先生を取り囲んで、さらに話が続けられる光景がしばしば見られた。

(3) 成果

2005年7月11日から7月14日に実施した一番新しいアンケート (表4) の結果から、オーラル・プレゼンテーションの成果を考察してみる。アンケート調査は、各クラスともオーラル・プレゼンテーションが終了した直後に行った。回収率は100%で、その内訳は次のようになる。1年次生: クラス3 (25名)、クラス13 (22名)、クラス19 (21名)。2年次生: クラス3 (20名)、クラス18 (19名)、クラス21 (16名)。

表4 学生へのアンケート

- | | |
|---|---|
| ① | トピックの選び方 |
| ② | グループ編成の仕方 (人数も含めて) |
| ③ | 発表形態 (グループあるいは個人のどちらがよいですか。) |
| ④ | 準備期間 (長いあるいは短い) |
| ⑤ | 準備に費やした時間 |
| ⑥ | AV 機器への対応 |
| ⑦ | 良かったこと |
| ⑧ | 困ったこと |
| ⑨ | 改善すべきこと |
| ⑩ | oral presentation を実際にやってみて、「英語を話す」ということについて何か意識の変化がありましたか。 |
| ⑪ | その他 (自由に書いてください。) |

最初に、「③発表形態」を考察する。前述の通り、ほとんどすべての学生にとってオーラル・プレゼンテーションは初めての経験である。グループには必ずと言ってよいほど、文法の知識が豊富な

人、発音が上手な人、さらには IT に強い人などがいる。個人の強みを発揮し、さらに自己の弱点を補完しあう意味で、初期の段階においてはグループでの発表形態が良いように思われる。少し論の流れから逸脱するようであるが、③の質問に少なからずの学生が、友人ができて良かったと回答している。前期ということもあるが、携帯電話を相手に一人である学生が散見されるキャンパスにおいて、オーラル・プレゼンテーションが友人づくりに一役かっていることは、予想外の副次的効果であった。

次に、全体的に見て「⑦良かったこと」を取り上げる。123名の学生がオーラル・プレゼンテーションを行ったが、否定的な意見を述べた学生は皆無であり、むしろ肯定的、積極的な評価が目立った。これは学年やクラスのレベルを問わず、全ての学生にあてはまる。大変興味深いことに、プレースメント・テストの結果が平均点以下の学生たちから、次のような言葉が出た。

- ① 文章を組み立てることで、文法がわかるようになった。
- ② 日本語を英語に直すのが楽しくなった。
- ③ 英語になじみやすくなった。
- ④ 一生懸命発表して、それがみんなに通じたので、達成感を味わうことができた。

一方、プレースメント・テストの結果が平均点以上の学生たちは、どのような感想を持ったであろうか。

- ① あらためて、英語はおもしろいと思った。
- ② 英語の文法の基本を守れば、良い英文が作れるとわかった。
- ③ 英語で長い文を作るのは初めてだったので、創造的な作業で、知的な刺激を得ることができた。

次に、「⑩ oral presentation を実際にやってみて、「英語を話す」ということについて何か意識の変化がありましたか」という項目についてである。これもレベルや学年によって大きな違いが生まれなかったのも、目に付いたところを挙げる。

- ① そんなに敬遠するものではないと思った。
- ② 少し緊張したけれど、意外と平気だった。
(これまで精神的に立ちがだかっていた壁を打ち破り、話すということに抵抗感がなくなった証拠である。)
- ③ 英語を話すのが嫌で嫌でしかたなかったが、今回英語をもっともっと話してみたいと思った。
- ④ 何回も読む練習をしていると、リズムよくすらすらと英語が出てくるようになった。
- ⑤ 相手に伝わる話し方を考えるようになった。
- ⑥ 発音、区切り、強弱、速度を意識するようになった。

「⑪その他」の項目に書いてあることも列挙する。

- ① 英語の聞く力（集中力）がついた。
- ② 自分が知っている身近で簡単な英語でも、人に何か伝えることができるのだという考えを持つことができた。
- ③ 達成感があったので、後期もさらに英語の力を身に付けてがんばりたい。

さらに、下記のような波及効果も生まれた。

- ① 以前より英語に携わる時間が増えた。
- ② 英語の本を読むようになった。
- ③ 週1回しか英語の時間がないので、毎時間を大事にしなければならないと思った。

これらの学生の感想や意見を総括すると、オーラル・プレゼンテーションは英語の4技能が、読

む力を除いては、おおむね有機的な関連性を持ち、それぞれの技能を高めるのに効果的であると言える。読む力は学生の動向を見ていると、あまり英語の文献にあたっていないようなので、現在のところ課題として残っている。しかし、これはテーマしだいで解決できるのではないかと思う。たとえば、何かについて日本と外国とを比較するとなると、当然英語の文献を読むことになる。さらに、オーラル・プレゼンテーションを行った後、英語の本を紐解くようになったという学生も多く、二次的効果からこの技能を達成することも可能であると考えられる。

もちろん英語教育において4技能の向上だけがその目的ではない。当然大学教育に課せられた人間教育の一端も担っている。前述した2005年度前期においてスポーツを主題にしたクラスにおいて、車椅子バスケットを取り上げたグループは、バスケットを通して、身体障害者がどのように生活の質を向上することができるかを論じた。また、柔道を扱ったグループは、世界に普及した柔道の現状を鑑み、礼節を重んじ、相手を慮る柔道を通して世界平和の実現を希求した。英語教育において、スキル教育が一輪だとするならば、人間に対する理解力と、人間の心を読み取る洞察力と想像力を育むことがもうひとつの輪であり、両輪がうまく回転することによって英語教育の目的を十全に果たすことができる。

4. 英語教育の課題と展望

筆者が取り組んでいるオーラル・プレゼンテーションは、その実践において初期の段階にあり、試行錯誤を繰り返しているというのが実情である。そのため、成果の箇所も学生の感想を記しただけに終わっている。今後はアンケートの項目を細分化し、結果を数量化する必要がある。また、外部試験などを用いてその成果を客観化し、次に繋げていく改良策を編み出す必要性もある。

また、言語環境の整備も求められる。英語の運用能力の習得において重要な要素は、時間と経験の量である。現行の週1回は何と言っても絶対量が不足である。せめて週2回にし、さらに90分を45分に分割して週4回にすることができれば、学習の継続性という観点から言えば大変望ましい。一方、これまで25名のクラスを少人数クラスと言ってきたが、アメリカのESL (English as a Second Language) のクラスサイズは10名以下である¹¹⁾。このことを考えると現在のクラスを2分するのが理想的である。

さらに、このようにして2年間に渡り蓄積した英語の力を、どのように生かしていくか、またモチベーションをどのように持続させていくかが、大きな課題である。残念ながら、本学では英語教員の数が十分ではないので、3年次生、4年次生を対象とした英語のクラスは開講していない。しかし、ソフトウェア情報学部は独自に、2年後期から「専門英語」を開始し、3年前期、後期と続けている。シラバスに記載されている最終段階の「専門英語Ⅲ」の目標を見てみると、「英文マニュアルなどを正確かつ速く読解する能力、テーマ設定された専門英文を速読し要約する能力、学術論文の内容を要約しプレゼンテーションする能力を習得する」とある。この学部のように、一般教育の講義で培った英語力を土台にして、4技能をさらに向上させ、専門教育に生かしていくことが大切である。一般教育の英語と専門教育を有機的に関連付ける環境が大学全体で整備されると、2年間の英語教育もさらに意味を持つようになると思う。

※本稿は、第55回東北・北海道地区大学一般教育研究会（2005年9月8日・9日、於岩手県立大学）において口頭発表した原稿に、加筆修正を施したものである。

註

- 1) 中山成彬、「国の責任で世界トップの学力復活を目指す」、『中央公論』、中央公論新社、2005年4月、92-100頁。

- 2) 岩川直樹、「誤読／誤用される PISA 報告」、『世界』第739号、岩波書店、2005年5月、125頁。
- 3) PISA の結果も含めて、学力や教育について、最近次の雑誌が特集を組んだ。①「学力崩壊—若者はなぜ勉強をすてたのか」、『中央公論』、中央公論新社、2005年4月、32—100頁。②「教育現場の変貌」、『現代思想』第33巻第4号、青土社、2005年4月、50—229頁。③「競争させれば学力は上がるのか?」、『世界』第739号、岩波書店、2005年5月、110—164頁。④「「読解力低下」は本当か?」、『日本語学』第24号、明治書院、2005年6月、6—63頁。⑤「21世紀の日本語教育」、『言語』第34巻第6号、大修館書店、2005年6月、22—80頁。
- 4) 2005年7月19日、大津由紀雄氏（慶應義塾大学）ら約50名が、中山文部科学大臣に、「公立小学校での英語の教科化に反対する要望書」を提出した。大津氏は2002年にすでに鳥飼久美子氏（立教大学）と共著で、『小学校でなぜ英語?—学校英語教育を考える—』（岩波ブックレット No. 652）を出版し、公立小学校への英語教育の導入に反対の立場を表明している。
- 5) 文部科学省が2003年に発表した『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』の中では、大学生の英語力の到達目標を、「仕事で英語が使える日本人の育成」と記述している。
- 6) 外国語教育に関する大規模な調査結果は、次を参照。大学英語教育学会（JACET）、『わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究』、「大学の学部・学科編」、2002年、および同学会、同書、「大学の外国語・英語教員個人編」、2003年。
- 7) 「大学の英語教育」、『英語青年』総号第1870号、研究社、2004年12月、2—30頁。
- 8) 「英詩を一般教養科目講義に取り上げる」、『英語青年』総号第1879号、研究社、2005年9月、20—22頁。
- 9) ALT を配置する JET (The Japan Exchange and Teaching Programme) プログラムの目的は、外国語教育の充実と地域レベルの国際交流の進展である。このプログラムについての成果や問題点については、次を参照。山田雄一郎、『英語政策としての英語教育』、溪水社、2003年、63—98頁。
- 10) それぞれの科目の主眼は次の通りである。「英語表現Ⅰ」：読む・聴く、「英語表現Ⅱ」：読む・聴く・書く、「英語表現Ⅲ」：読む・聴く・話す、「英語表現Ⅳ」：対話。
- 11) ESL の初級者を対象にした授業時間とクラスの人数に関する調査結果は、次を参照。Robin Oberg, “Effects of ESL Time and Class Size on the Achievement of LEP Students,” U. S. Department of Education, Education Resources Information Center, 1993.

参考文献

- 1) 飯泉恵美子／T. J. Oba, 『はじめての英語プレゼンテーション』、ジャパントイムズ、2005年。
- 2) ウォルターズ, D. E. / G. C. ウォルターズ, 『アカデミック・プレゼンテーション』小林ひろみ／小林めぐみ訳、朝倉書店、2003年。
- 3) 加藤浩, 『プレゼンテーションの実際』、培風館、2003年。
- 4) 久保田浪之介, 『研究者のための国際学会プレゼンテーション』、共立出版、2002年。
- 5) 作山宗久, 『プレゼンテーションの技法』、TBS ブリタニカ、1998年。
- 6) 鈴木孝夫, 『英語はいらない! ?』、PHP 研究所、2001年。
- 7) 妻鳥千鶴子, 『英語プレゼンテーション』、ベレ出版、2005年。
- 8) ディーン, フィリップ／ケビン・レイノルズ, 『英語プレゼンテーションの基本スキル』、朝日出版、2003年。
- 9) 藤井正嗣／テリー・サイモンズ, 『戦略的英語プレゼンテーション』、DHC、2004年。
- 10) 三浦信孝・糟谷啓介編, 『言語帝国主義とは何か』、藤原書店、2002年。
- 11) 山田雄一郎, 『英語教育はなぜ間違うのか』、筑摩書房、2005年。